武田泰淳全集

第十四卷

武田泰淳全集

第十四巻

筑摩書房

武田泰淳全集 第十四巻
昭和四十七年五月二十五日 第一刷発行

著者 武田泰淳
発行者 井上達三
発行所 東京都千代田区神田小川町二ノ八
株式会社 筑摩書房
電話 東京(元)七六五一(代表)
振替 東京 四一二三
郵便番号 一〇一—九一

印刷 株式会社 三松堂
製本 和田製本工業株式会社

(分類) 0395 (製品) 72414 (出版社) 4604

第十四巻　目　次

新編・私の映画鑑賞法

映画と私……3
戦争映画の魅力……9
映画と未来小説……10
映画の闇……16
陽気なドン・カミロ……18
チャップリンとディズニー……22
「裏窓」と庶民生活……26
映画と文学（Ⅰ）……27
映画と文学（Ⅱ）……29
女優について……30

映画はかみくだく……38
戦争映画について……43
つくり出す者の強み……46
「ジェルソミーナ型」とは何か……48
戦争映画のおもしろさ……51
お盆の「英雄」たち……53
映画は心理描写に成功した……56
映画と文学（Ⅲ）……58
記録映画「メソポタミア」を見て……65
豊かな〝第二の現実〟……66
珍しい企画の面白さ……69
脚本家の苦心に注目……71
国際性と民族性……73
日本映画の世界性……76

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

映画の道徳的働き……78
うまい商売と無神経さ……80
心のやさしさとこまやかさ……83
パリと東京……85
記録映画と新しいモラル……86
映画・テレビ・活字文化……89
映画批評のこと……90
しっかり者の運命……92
〝街の学校〟映画館……94
国際色と国際性……95
発展するホーム・ドラマ……98
映画と文化交流……101
よろめきと日本女性……102
新鮮な「現実」の発見……107

傑作が生れるまで……109
巧妙な刺激とは何か……110
肉体の魅力……113
前宣伝と自分の感動……114
日本映画にもの申す……117
だんまり芝居……118
ひしめき合う喜びと悲しみ……121
映画と国際常識……124
女の肉体、男の肉体、地球の肉体……125
笑いと喜劇と人生と……128
ノンシャランな映画二つ……131
「13階段への道」が投げる問題……132
神々の復活を歓迎する……134
極大から極小まで……140

エロティシズムの政治学……143
愛のむずかしさ……150
感じのいい人たち……154
映画と文学の違い……157
第二の目、第三の目……160
宗教的とは何か……163
笑いとおどろき……166
タデ食う虫と作家の眼……169
肉体のうつろい易さ……172
一筆啓上……175
宗教映画の秘力……176
ナマの人間とナマの世界……178
〝自然死〟に対する観客心理……181
むずかしい国際問題……186

詩人の映画……190
見せものの裏側……194
いくら一億総批評家でも……198
残酷とは何か……203
劇と映画の夫婦づき合い……207
奇妙なことへの熱中……211
芸術の列車は走る……216
人間、この異様なるもの！……220
理屈と感情の食い違い……225
「日本昆虫記」ロケを見て……229
形容しがたい恐怖……231
忘れられない人物と画面……234
映画館の楽しみ……238
「裁き」の予言……239

〝古典的〟とはなにか……241
現代女優論・左幸子……244
映画「怪談」を見て……246
007の秘密……248
『私の映画鑑賞法』あとがき……251
団地の春……253
「いなか者」と「世界人」……255
江藤淳氏へ……257
昭和に入って……258
百人一首……259
『完本・高見順日記』を読んで……261
『世界憲法集』を読んで……262
文学者に悪い奴はいない……265

大風起って……267
暴力について……268
〝愚　鈍〟……270
ハニヤ式「眼法」について……273
反俗精神……278
あ　ん　蜜……306
中村光夫著『想像力について』……308
中野重治著『忘れぬうちに』……310
ハリー・ベラフォンテ……311
政治悪の教科書としての『三国志』……313
中年男は痛感する……315
内山完造著『花甲録』……316
法務総合研究所編『犯罪白書』……318
中国古典文学全集31『歴代詩選』……319

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

丸谷才一著『エホバの顔を避けて』……320
文化界への直言……321
北海道の原野……323
政治家と文学者……325
『小島信夫集』解説……335
夢と現実……341
法然上人……345
宋元美術の愉快な哲学……348
本郷・小石川……353
「私」への反省……354
スタンダール『赤と黒』……356
苦難に満ちた記念碑……358
飲食男女……359
「狂言まわし」としての悪……361

『花と花輪』あとがき……365
蟹とサボテン……368
わが小説『森と湖のまつり』……369
菊の花、河、大地……371
解説……佐々木基一 377
解題……387

評

論

4

新編・私の映画鑑賞法

映画と私

すべてのものは、変化する。変化して、とどまることを知らない。変化しないものは「存在」ではあり得ないのであり、存在するためには、たえず「変化」を維持して行かなければならないのである。「存在する」という、いくらか安定を意味することばと、「変化する」という、やや不安定な匂いのすることばとは、実は、背と腹のようにぴったりと結合されて、ひきはなすことは不可能である。無限に自由な変化こそ、「存在」をいきいきと動かすもの、「存在」をしっかりと支えている条件なのであって、この条件、この動かすものなしには、「存在」は、高空でひらいて、空気の抵抗でふくらんでいたパラシュートが、地上に降下したとたんに、無意味な大きな白い布にちぢかんでしまうように、何事をもなし得ない、哀れなひろがりにすぎなくなる。

芸術の歴史が、無限に自由な変化の歴史であることは申すまでもない。

そして、芸術の歴史において、映画の世界ほど、この「無限に自由な変化」の喜びを、急速に充分に味わわせてくれたものはない。

芸術は、人類が生み出すものである。と同時に、生み出された芸術は、人類にはたらきかけ、人類を楽しませ、人類を変化させるものである。そして、生み出された芸術と生み出した人類の関係、いわば母と子の相互関係は、予想以上に複雑微妙なものであって、その全体を完全に分析しつくすことのできた、歴史家も、文明批評家も、まだ地球上には一人もあらわれていないのである。それは決して、かつての歴史家、文明批評家が無能力だったためではなくて、ただただ彼らが、あまりにも無限に自由に変化する人

類と、その生み出した芸術という、ゆれ動いて一瞬も停止することのない二隻の船のあいだで、さらにはるかに無限に自由に変化してとどまることのない「存在」の大海に、全身を沈めていたからにすぎないのである。

映画自身の、すさまじい進歩発達、つまりは大変化が、芸術の変化性をあざやかに物語っているばかりではない。人間社会のたえまない変化を、映画ほどあからさまにキャッチした芸術的手段はなかったし、しかも、その上、生み出したものと生み出されたものとの、ゆれ動く相互関係を、これほど見事に精密に測定し表現した、文化の針はほかに見あたらないのである。その原因の一つは、すべての芸術（文学、音楽、絵画、舞踏、祭典、建築、衣裳など）の変化性を、もっともこだわりなく、もっとも有効に吸収してしまう作用が、映画にはあたえられているからであろう。永久不変の美をたたえた、ある一つの古き庭園をうつし出すさいにも、カメラの眼は、大切に保存された一形式の周辺の、まだ形式化されていない新しいざわめきまでもとらえてしまうために、絶対に変化するはずのない堅固な「美」の形式が、実は、あたかも海流に浸蝕される岩肌の如く、大きな自然の胎内にただよっているにすぎないのだと、教えてくれる。

映画は、ピカソの作品を天然の色彩でうつしとるばかりでなく、製作しつつあるピカソの、なかば裸の肉体をも写しとどめる。静止した「美」として後世に残される。このフランス画家の絵画が、完結した形式として、記録されるのではなくて、エネルギッシュに動く彼の手の速度、老人の腹部に寄ってきた皺の集り、カメラを意識したような、無視したような彼の、ほとんど傲慢な姿勢、描きはじめたときと、描き終ったときの眼の色の変化まで伝えずにはおかない。おまけに、ピカソにくらべて、はるかにやせ型で都会人風の、ビュッフェの仕事ぶりも、別のフィルムにおさめられているのであるから、この二人の作品を現物でそのままに鑑賞する以外に、フィルムの中の二人の画家の「生きた肉体の動き」を、見える手足から、見えない神経に至るまで自由に比較研究できるのであって、そこには、映画ヌキの時代とは全く異なった芸術の鑑賞、芸術の研究の世界が、ひらかれつつあるわけである。

私は、小学校に入学する一年ほど前に、はじめて映画を見せられた。

見せられたのであって、見に行きたがったのではなかった。母と叔母のあいだにはさまり、映画館の二階の一ばん前の席に坐っていた。その頃の映画館では、履物を脱いであずかってもらうか、靴カバーをはめてもらうかして入場し、三人ぐらいの楽士のうち、母と顔見知りのヴァイオリ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com